

生稲わらサイレージの 肉用牛への給与効果の検討

稲わらは肉用牛の重要な粗飼料源ですが、稲わらの乾燥・収集作業が天候によって大きく影響されることから安定的に確保するのが困難であり、普通型コンバインの普及とともにその生産量は減少傾向にあります。一方、刈り取り直後の生稲ワラは天候による影響が少ないことから、生稲わらサイレージの収穫・調製技術が開発されつつあります。そこで、肉用牛に対する生稲ワラサイレージの給与効果を検討しました。

☆ 技術の概要

1. 稲作農家から収集した生稲わらに乳酸菌製剤(畜草1号)を添加してロールベールサイレージを調製しました。サイレージの水分は41.3%で、日本標準飼料成分表から現物当りのTDNは25%と推定されました。
2. 配合飼料は自家配合飼料を体重により増給し、粗飼料との分離給与とし、給与量は、試験区および対照区とも同様としました。
3. 黒毛和種肥育雌牛の肥育前期および肥育後期において、前期チモシー乾草(3kg/日)および後期乾燥稲わら(1kg/日)の代替として生稲わらサイレージをそれぞれ3kg/日、1kg/日を給与しました。1日当TDN摂取量・乾物摂取量に差はありませんでしたが、粗飼料の摂取量が試験区で少なくなりました。体重、体高の発育および肉色以外の肉質には差がありませんでした。
4. 交雑種(黒毛和種×ホルスタイン種)肥育雌牛の全肥育期間において、前期チモシー乾草(3kg/日)、中期および後期の乾燥稲わら(2kg/日、2kg/日)の代替として生稲わらサイレージをそれぞれ4kg/日、2.5kg/日および1.5kg/日を給与しました。1日当TDN摂取量・乾物摂取量に差はありませんでしたが、粗飼料の摂取量が試験区で少なくなりました。体重、体高の発育、バラの厚さおよび肉色以外の肉質には差がありませんでした。



写真1 生稲わらサイレージと給与試験

☆活用面での留意点

生稲ワラサイレージは水分が多くTDN含量が少ないため、飼料設計に留意する必要があります。また、生稲ワラサイレージを分離給与すると、粗飼料摂取量が低下する恐れがあるため、粗飼料要求量の多い肥育前期の給与及びルーメンアシドーシス等の疾病の発生に注意して下さい。なお、詳細については、静岡県畜産技術研究所 肉牛科 鵜飼典佳(TEL: 0544-52-0146)にお問い合わせ下さい。

(日本政策金融公庫 農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 加茂幹男)